

松月堂書流
四季混雜

238.

生花百瓶圖

天

395



尾陽五大坊雙蛾先生著述

松月堂古流

四季混雜

生花百瓶圖

全三冊

花書所

前川文榮堂

松月堂古流生花百瓶序

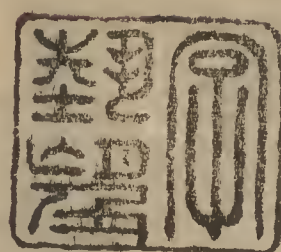
抑花之行于世也國初以前未嘗有之
有之猶神之所歎也之內有或觀之者
矣慶元而後逮近世好之者其都鄙下
及士庶而海內稱抑花者流者亡慮數
千家各異其體生

憲おふゝ極哉皆嘗竊諦此伎之
不可已也擬佳日再環席引東賓
之際先相臨猶魚美ふゝ不設之
新為最ふ親遊而ふ能出梱お乞
翫之其興味ふゝの謂矣宜哉成之行于
之隆然推之則矣

國家昇平洪沃之化為雨也
五大坊老幼傳古法于披陽有季
于茲境之成君之憂歟畫門人所揮
之成法之不解為畫家之模倣今
成將梓坊最予題一字不巧周知
漢是卷首

文化六年己乙未端午日

各守社 留春軒 池廣 漢序



松平重吉侯生華百飛置身序

加賀守之も雙守方御代の由ある久松能あはれを
つゝも乃土といふ國へ及ひし時忠外も先
かゝる唐儒の如くあはれむし治世を玉輝の
道にたもつ物ともむろいふにぬるも唐に御
代に見えたる松能家の教をせむとてふまはつ
南の地よりあききし詩をむくはる地をあらは
夜に短き書詩作し人とおぼしめすを以て郭公侯

つ声替ふてゐるを平仄と稱し、此語もまた人の
聲の高低を記すに當りて、友成翁の以てこれを
先づ解するは固まらずとも、八代といひた
玉積のかゝぬ方色能く辨け難き事をいへる
雪且日の夕能く書合ふたと云ふも、山平
水波流るる如くかゝる形の時節なり。又
玉柳春風の如くおどろおどろしく、僕
昔は拙筆を業として、白雲を命ずるもの

文化能始を危張を所をきりしるる早振
 神のまじ國を迫りさるる也所照のあをほり
 雨あふまみの國にふをたつて枝をまけりて
 初とふ消い遠せしふ花とを数人
 僕
 二頭
 の

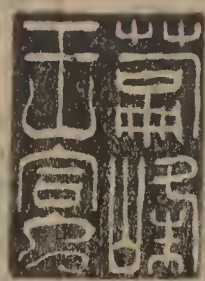
石能上婦とてそいふに起今も尊なる人
能くしる事ありき人なりわが尊なる人
名を人にしりてその物を知る

皇麟雄雄軒改号

文政二年

卯復

五方雙蛾



軋
四

五体の多しの陰陽五の配の語の語

正花
天阳

阳天

相令

中央土

通用

人法

件

7月地

福

性阴

求 臣

○本月三角の額
花ふり愛敬をより月より多く生るもの支を并と

[illegible]

[illegible]

○柿の木の葉の影

[illegible]

乾六

○林示華一の話

[illegible]

あざみ　　いふ　　百白紅　　紅尾　　とて
白きん　　隠え　　色　　の　　夢
松　　松　　或　　二月　　方　　ふ　　ゆる　　を　　角
竹　　松　　或　　七月　　方　　ふ　　ゆる　　を　　角
と　　の　　頭　　の　　き　　ふ　　て　　の　　後

上
書
婦

漢
書

時節
宜
准
為
也

○草 亦 西面拂の松
料 ふふふふふふふふふふふふふふふふ

相
勢
山
子
松
庭
庭
木
天
未
利

己上ありける歌これより後ありきなり
ふし余に類するものありて思ふに

下
子
大
小
龍
小
子
子
子
子

丁巳仲夏
丁巳仲夏

とそよりいふに、
たゞてゝ人々を
おぼしめすに
あらず。されど、

○ササ張物の類を并べて

軋七

花咲くも
春の風
ふと
あはれ
と
思ふ

志柳 有るは
 物獨柳 芳と此所
 有るは

[illegible]

七
 八
 九
 十
 十一
 十二
 十三
 十四
 十五
 十六
 十七
 十八
 十九
 二十
 二十一
 二十二
 二十三
 二十四
 二十五
 二十六
 二十七
 二十八
 二十九
 三十
 三十一
 三十二
 三十三
 三十四
 三十五
 三十六
 三十七
 三十八
 三十九
 四十
 四十一
 四十二
 四十三
 四十四
 四十五
 四十六
 四十七
 四十八
 四十九
 五十
 五十一
 五十二
 五十三
 五十四
 五十五
 五十六
 五十七
 五十八
 五十九
 六十
 六十一
 六十二
 六十三
 六十四
 六十五
 六十六
 六十七
 六十八
 六十九
 七十
 七十一
 七十二
 七十三
 七十四
 七十五
 七十六
 七十七
 七十八
 七十九
 八十
 八十一
 八十二
 八十三
 八十四
 八十五
 八十六
 八十七
 八十八
 八十九
 九十
 九十一
 九十二
 九十三
 九十四
 九十五
 九十六
 九十七
 九十八
 九十九
 一百

[illegible]

てまゝに松籟をあらわす

葦 芦 芒 萩 藎 の ん 芒 の ん 萩 の ん

世を
 之を
 新
 夢
 夢
 夢

○葉物類の係

道有六

大業霍翼の部

黃雲山 馬為東 茗荏 沈子 吳

麻姑不
行也
是子
雲卿
也
云卿
云卿

○主居客者の儀

此乃其人子也

主人むをぬるふとくは説りて高麗うへ
 馬をまづはふとくは説りて高麗うへ
 旧の年の年主者とは羽の老のうへと
 の馬の羽には羽あり

○花器ニナクありの儀

故是のち法郎の撰出と云ふの字を集め毎て

大黒
 傳書乙西安師江
 傳書師江
 虎の獅おに

乾
九

豫子之
衡
豫
子
之
衡

己
上
七
八
抄
箇
子

大ニ至
少ニ至
其ニ至
其ニ至

壽也 爲援之 猿候之重

己
上
七
八
二
三
み
り
の
い
や
え

尺八一切

銅

乙上二品 並同なり

舟
寶舟
丸舟
仲夏舟
像船

渡海船

己と爲るなりんとす和ニ毫
毫博覧と効阿保

二 重 一 集 一 中 一 後

のむしにととてふたつとて

上
正

下令通体
上正令

下
通
休
留

上正令通

下
体
留

上
正令通体

下
留

[illegible]

○三溝板の法

考校を以て師と爲す

〇花
 留居の地
 八角地蔵
 〇花
 留居の地
 八角地蔵

軋十

○五 体ニテ配肉の後
五り 五仲とは之も食ひたの柯と云ハ仲乃
高多し 少くて二枝とある事とを弁
正 通 体

南流は抑止し、東流は西へ入る。其の勢は、
 てきまを待てと、さういふは、乃て、先を、つ、
 あ、と、いふ、守、り、の、指、を、中、に、し、
 度、は、不、准、と、是、等、は、死、配、を、あ、め、て、い、
 け、付、あ、い、し、解、と、さ、い、し、今、解、は、あ、い、
 入、と、さ、い、し、解、と、い、し、或、は、隅、を、さ、い、
 蟹、或、は、隅、と、い、し、是、も、さ、い、し、
 と、い、し、と、或、は、さ、い、し、も、用、物、
 鮓、石、の、亀、の、を、あ、い、し、
 ち、さ、い、し、は、あ、い、し、

天人通地傳

陰体
陽正
五行通

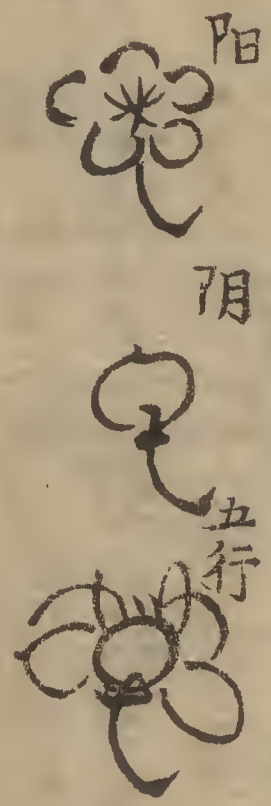
皮肉骨

体体
相正
用通

真体行通走正

父子

○花葉の陰陽の説



右二十五ヶ条を初めたる法を相授せし
一書方授書集 一の也 猶原を
標しむるは 其意を述る

五ヶ条 玉拾遺



神邦之社中

會頭

業名

聖洞齋所本曉

桃
椿



九
萼
連

東名船馬街

會
心
亭

猶
柳
紅
假
夷
菊



九
萼
連

東名新町

遊
僊
窟

葉蘭

金仙花



永芳連

朝明郡小牧

此模軒時英

軋十三

作
や
ち
り
ん
の
花
は
純



豊洲連

朝明郡東富田

浮月菴

芍藥



三重郡馳出

興雲軒
其龍

軋西

柘榴



玉葛連

三重郡下鶴川原

好
靜
舎

石菜

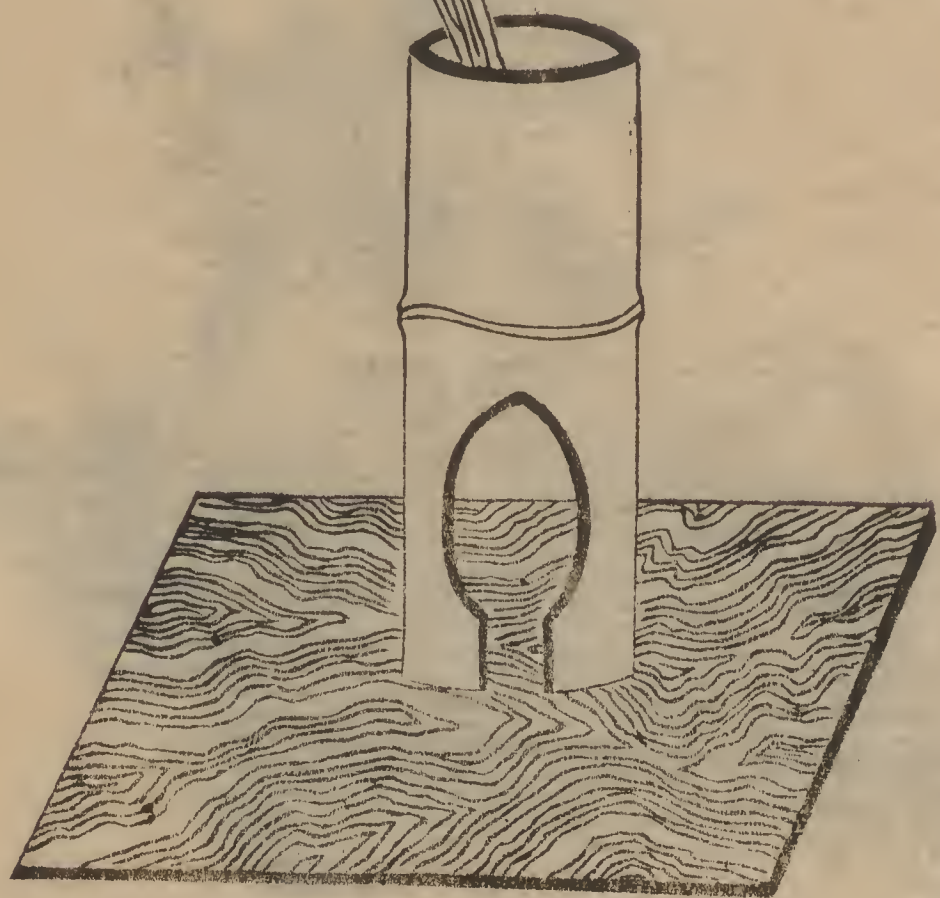
三龍連

三重郡平尾



立

齋



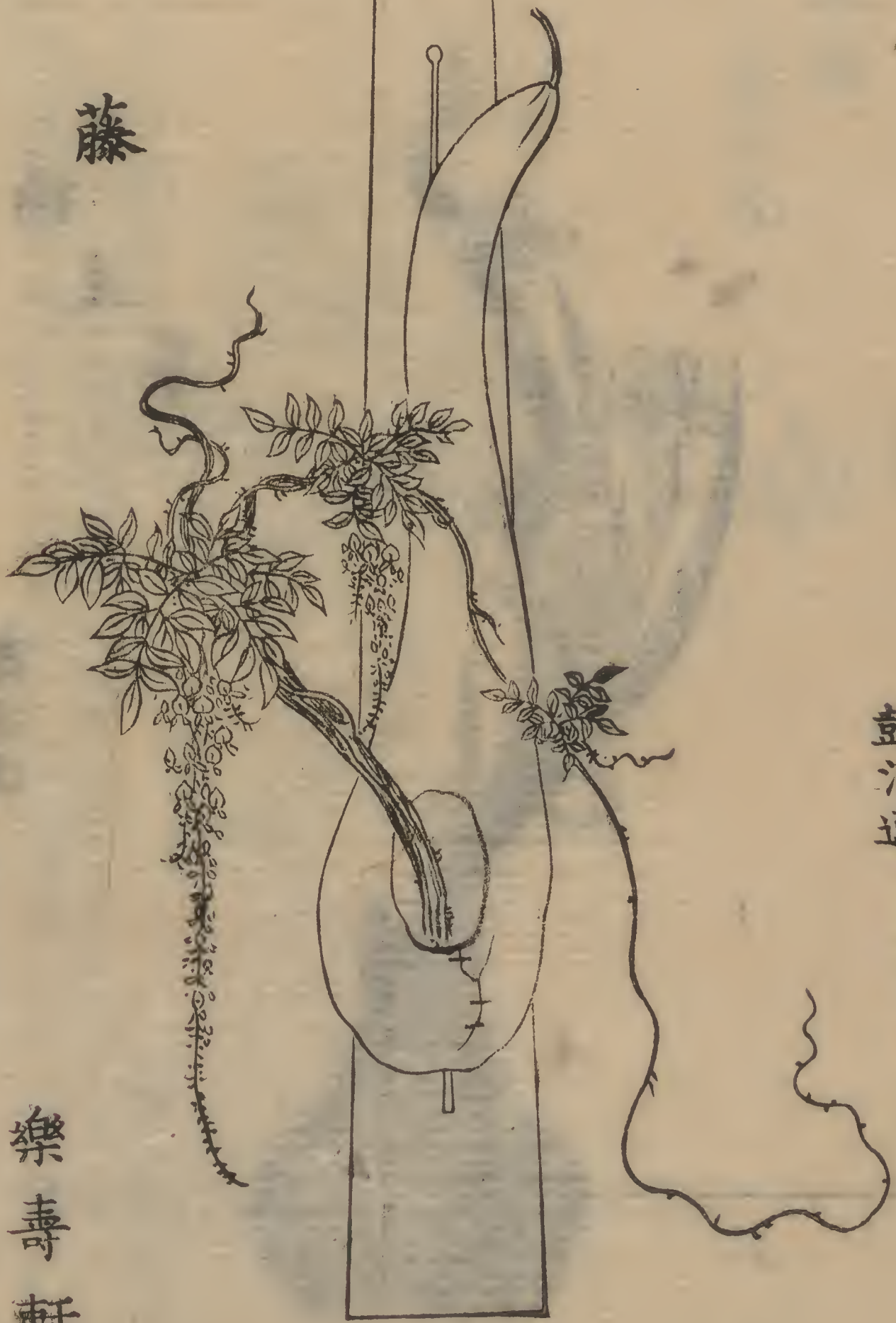
藤

鼓浦連

白子寺家

樂壽軒

善甫



鴿
尾
蒼

鼓浦連

安濃郡納所

樂只堂
無逸



木槿
金仙花



洞津大門前

阿部

江甫艸
水葵



洞津大門前 四角亭 窓月

葵



四日市南町
竹養軒 子成

紫
蘭



九
琴
連

京名新早

耳
露
園
一
兩

蒲
子
蒼

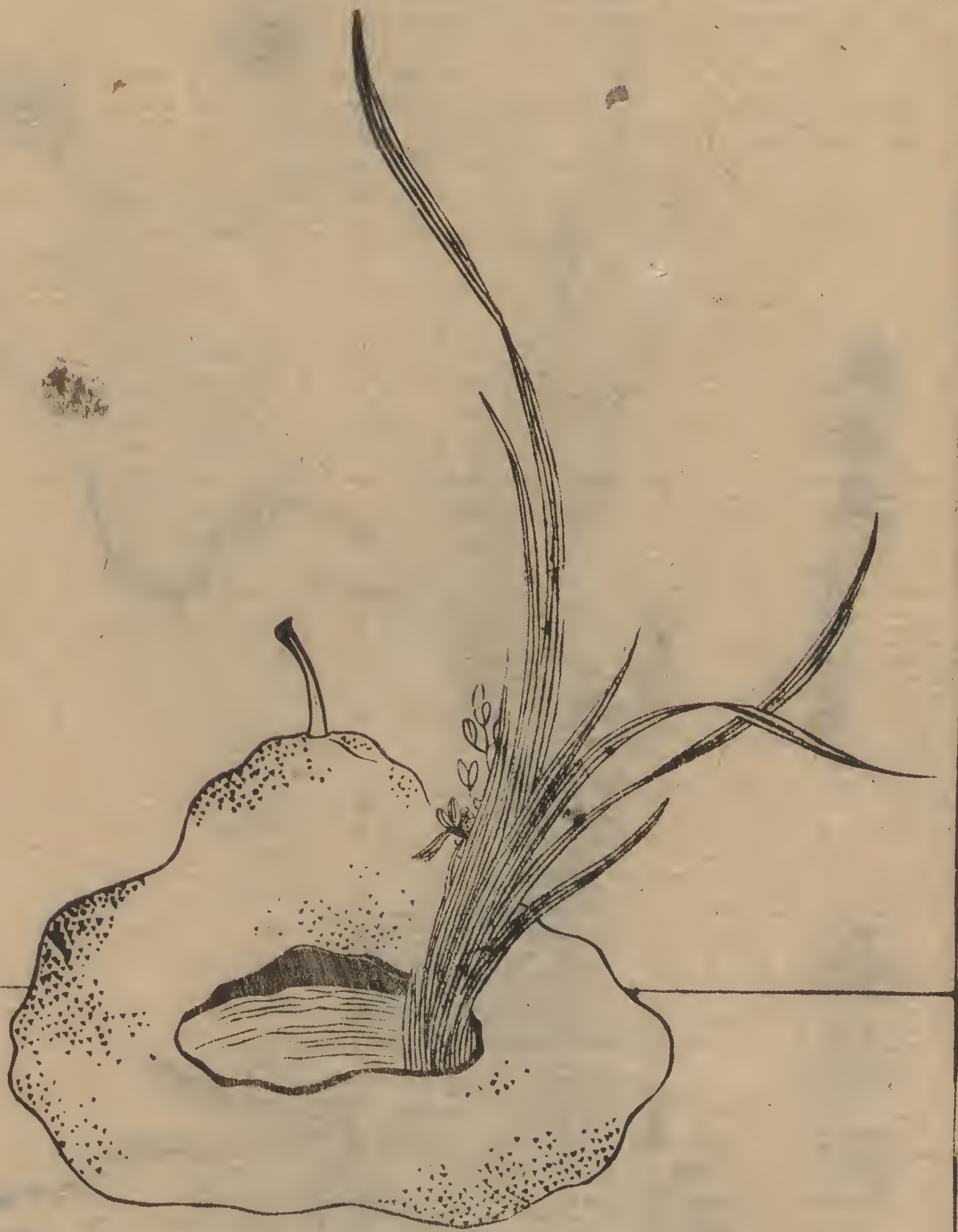


鼓
浦
連

白子寺家

長
谷
川
斗
口

蘭



鼓浦連

白子寺家

中村戲蝶

乾十九

枇杷水仙荅



永芳連

朝明郡田光

高峯軒里日

梅椿



大谷連

員辨郡東一色

胡蝶園

一夢

酴醾



同所

負川館

雅遊

椿名秋ノ山



大谷連

員辨郡大和泉

三餘窟

味長

乾三十一

射干



王葛連

三重郡下鶴川原

水
酉
亭

梅水仙谷

永芳連

朝明郡杉谷

小五臺

溪鶯



大谷連

員辨郡北大社

無二軒無三

紫蘭



柘榴
小菊



永芳連
朝明郡小牧
鳳尾軒子晉

鳶尾

洞津 堅町

雪全齋 陪之



紫 蘭

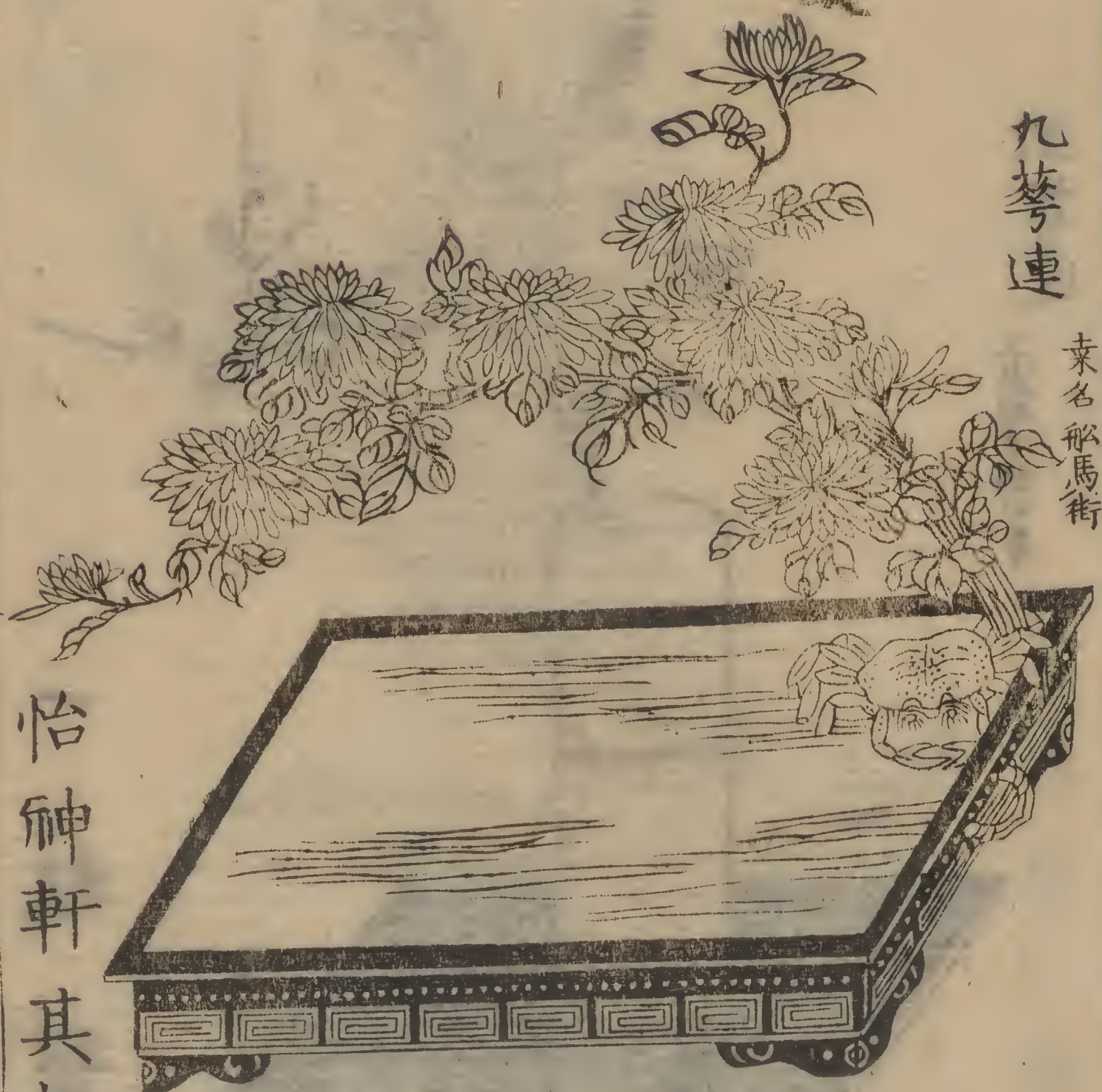


大谷連

員辨郡東一色

玉泉庵 孤月

黃 白
大輪菊



九萼連

東名船馬街

怡神軒其調

白梅
赤椿



一枝齋

玉葛連

三重郡下鶴川房

同前

同所

大鵬軒一舉

朝鮮
射干



燕紫苔



永芳蓮

朝明郡永井

綠竹菴

軋二十六

庭德茶樹



御直門

員弁郡東一色

五行坊主人

桃
白椿



九萼連

素名宮通

海輝亭笑流

檜扇
薩摩野菊



同
前

同所三崎通

松
窗
亭

梅水仙花



永芳連

朝明郡田光

不
思
齋

梅水僊花



永芳連

朝明郡小島

荅王園
獅狂

鳶尾



永芳連

朝明郡千種

輝星軒一慶

乾平九

女郎花



玉葛連

三重郡下鶴河原

翫花堂

花
菖蒲

玉菖蓮
同郡河北

鳳鳴館



軋三十

木賊
金僊花

三重郡塩濱

有庸軒



狗子桺 赤菊

御直門

東名京町

雪洞齋主人



